

山中温泉「芭蕉堂」の建立

綿 拔 豊 昭*

The Study of erection of “Basho-do” at Yamanaka hot spring

Toyoaki WATANUKI

抄録

松尾芭蕉没後、その門流は、芭蕉を神格化し、それにまつわるイベント等を行い、「蕉門文化」というものを形成した。全国的に芭蕉関連の句集・句碑等が現存している。その一つ、一つを丁寧に調査・研究し、いずれまとめて体系化することは、日本文化研究において重要な意義を持ちうる。

これまで石川県山中温泉にある芭蕉堂については、研究論文として公表されたものはない。本論では、文献考証により、芭蕉堂がいかなる経緯で、建立されるにいたったかについて明らかにした。

Abstract

Basho Matsuo's school deified him after his death. And they performed the event which concerning Basho, and they formed "Shomon culture". Collections of haiku or a stone tablet related to him exist nationwide. The material is studied each carefully and systematized collectively. It has an important meaning in Japanese cultural studies.

About Basho-do at Ishikawa prefectural Yamanaka hot spring, it is not officially announced as a thesis until now. In this paper, I studied historical evidence of documents, and proved how it had been build.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
Graduate School of Library, Information and Media Studies,
University of Tsukuba

はじめに

日本の俳諧史上、最大の流派は「蕉門」である。江戸時代の著名な俳諧師松尾芭蕉の門流のことを意味し、その門流の俳人らは芭蕉を神格化し、崇敬する。その有様は頗る宗教的であり、比喩的に述べるならば、芭蕉を教祖とし、芭蕉を信仰し、芭蕉に帰依する教団的組織が蕉門であり、明治18年には「神道芭蕉派教会」が設立されたりもしている。

宗教的営為には文化的な一面があり、歴史関係の書物に、仏教文化、キリスト教文化といった、「宗教十文化」で形成された言葉は、屢々用いられる。「蕉門」も、「蕉門文化」と称することが可能な文化的営為が見られ、文化的産物が残っている。例えば芭蕉の命日には、「時雨忌」と称して、句会といった儀式が、様々な規模の組織で開催される。当然、その儀式で詠じられた多くの句が現存する。また芭蕉の遠忌には、特に盛大な行事が行われ、内的には信者の結束力を高め、外的には信者の力を誇示するがごとき記念句集が編纂されることがある。また「浄財」ともいうべき「寄附金」が集められ、句碑や堂などが建立されたりもする。明治26年の200回忌のおり、芭蕉廟を東京深川に建立するさいには、全国からの寄附金約1630円が寄せられた。こうしたことは、時間的には芭蕉没後から現代まで続き、空間的にはほぼ全国に見られる文化的営為であり、日本の文化研究で看過すべきではないと考える。本稿は、その事例として、明治43年に建立された山中温泉（石川県）の「芭蕉堂」について、『俳諧白嶺集』（注1）を基礎資料として述べるものである。

1 山中温泉芭蕉堂の建立案が出るまで

芭蕉堂建立が話題にあがったのは明治42年の1、2月頃と考えられる。『俳諧白嶺集』（第47巻、明治42年3月）に以下のようにある。

今時同好相寄り相結び、翁が遺風の慕ふの余り、芭蕉堂を建んの議あり。天下に呼号して、大方の同情に訴え誓つて、其成を期せり。萎文宗匠又大に此挙に賛し、陰に陽に努力せられつゝあり。

壇主萎文宗匠参会の序、山中温泉へ参られ、別紙広告の芭蕉堂設置の協議纏り、いよ／＼着手の事と相成候に付、何卒諸君奮て御賛成、御放財奉希上候。

「同好」とは、「蕙廼家俳壇」に属する「山中連」の俳人である。同俳壇は園亭萎文（後述）が壇主をつとめる。その会誌を『俳諧白嶺集』という。会誌には、壇主と会員の活動が記される。そのため「芭蕉堂」についての記事も掲載されることになり、このことに關しての基礎資料となる。

「翁が遺風」の「翁」は芭蕉のことである。蕉門では、特に断らず「翁」といった場合、「翁」は一般名詞でありながら芭蕉を意味する。したがって芭蕉堂を「翁堂」といったりもする。

「萎文宗匠」は、本名渡辺太余文。天保12年6月29日生、大正3年5月28日没、享年74歳。京都の芭蕉堂の開祖南無庵蘭更門弟の園亭鹿古の曾孫。俳諧は祖父の岱岳に学び、のち十丈園十丈に師事。住所は金沢の越中町22番地。加賀地方の有力宗匠である。編著に『俳諧正式鑑』などがある。（注2）

山中温泉で芭蕉堂の協議がはかられたのは、一つには、山中温泉は、芭蕉が立ち寄り、句を詠んだ「芭蕉ゆかりの地」であるにもかかわらず、そのことを示す記念碑的なものがなかったからである。獺祭魚窩「山中温泉芭蕉堂建築の拳」（『俳諧白嶺集』第52巻、明治42年9月）に以下のようにある。

天地は永劫なれども遺跡は居諸を経て没するもの渺ならず。我山中の温泉は、元禄二年、蕉翁が、其効有馬に次ぐと、菊はたをらじの句を止められし処なれども、一の俤の見るのはなし。（注3）

二つめは、当時、山中温泉では俳諧がさかんであり、その地の主な俳人が蕙廼家俳壇に属し、萎文は山中温泉の俳人とかかわりが深かったからである。例をあげると、『俳諧白嶺集』（第43巻、明治41年11月）に

○山中時雨会

壇主萎文宗匠の入浴有しをよき幸として、十一月三十一日午後六時より、越後屋亭にて催せる手向吟

として、山中温泉の俳人である塚田豊秋、南保霞溪、山本霞暁、生雪、大辻酔月、大墨紫明、華鈴、奇泉、松村秋月、瀧本曉嶺、加藤吟雪、近江一静、鹿野焙芳、松浦紫陽、打手小槌の句が載る。（注4）

芭蕉が没したのが元禄7年10月。その季節にちなんで芭蕉の忌日を時雨忌といひ、それにちなむ句会を時雨会という。蕉門俳人の重要な句会である。右の「山中時雨会」に、松村秋月が以下の句を詠じている。

翁忌や洪茶ながらもこころざし

「翁忌」は芭蕉の忌日、「洪茶」は若くないことの比喩、「こころざし」は俳諧

へのところざし、すなわち「今日は翁忌である、もう若くないけれども、俳諧の道をごろざしていこう」といった意味である。こうしたあからさまな意志表示をした句もあるが

慕ふ日の今年もおなじ寒さかな 焙芳

といった、その日の景物等を詠むものが多い。焙芳の句は「芭蕉を慕う時雨忌は、これまでと同様に今年も同じく寒いことだ」といった意で、毎年時雨忌に芭蕉を慕っていることをうかがわせる。こうした芭蕉を慕う会を積み重ね、仲間意識が強固になっていくのが常である。

また姜文は「此名湯を世にしらせよ」と、『俳諧白嶺集』で鹿野焙芳に「菊の下露」を連載させている。

そして、こうした背景のもと、事が進み、「御放財奉希上候」と寄付金が募られることになる。『俳諧白嶺集』(第50巻、明治42年7月)には以下の句が掲載されている。

山中芭蕉堂の拳を歎びて 時得たる風のはこびや夏木立 松任 虎岳(注5)

2 芭蕉堂寄附金

先に『俳諧白嶺集』(第47巻、明治42年3月)に

壇主姜文宗匠参会の序、山中温泉へ参られ、別紙広告の芭蕉堂設置の協議纏り、いよ／＼着手の事と相成候に付、何卒諸君奮て御賛成、御放財奉希上候。とあると述べたが、文中にある「別紙広告」については不明である。ただし同巻に以下の記事が載る。

● 広告

加賀山中芭蕉堂寄附

- 一金貳拾円也 金沢 園亭姜文君
- 一金拾円也 全 渡辺 常君
- 一金拾円也 全 杉原臥月君

また「加賀山中芭蕉堂新設趣意書」と題された次の一紙が配布された。石川県立図書館月明文庫所蔵『俳諧白嶺集』(第48巻・明治42年4月)に挟まれている。これが「別紙広告」にあたる可能性もありうる。

加賀山中 芭蕉堂新設趣意書

加賀山中温泉場の俳諧に因ある事は彼これは／＼の貞室翁が此地俳友に一棒を受けて畢生無料に点評し殊に芭蕉翁は北枝曾良を伴ひ来り桃天等を教示し山中問答俳諧発句あり猶黒谷の勝地に於て行脚中の愉快なり連手を叩き謡を諷ひ給へる由草庵集にあり爾来俳客はさらなり貴顕紳士縉素庶民の隔なく浴客雲集日に月に繁盛の地と成も菊は手折らし湯の句ひの徳により此地地霊泉湧出のみならず交通便よく山川の美八景十勝を称し夏涼く冬温く肴魚菜に富み実に梅通宗匠が山中や物足る上の時鳥の吟に適し天下無双の神園なり斯の如く芭蕉翁が恋愛の地なれば茲に一堂を建て傍ら俳諧堂を竝設し永く翁の徳を報んとす乞ふ俳諧に志を寄る士は多少に関せず放財あらん事を

追て設計は高樓華美を欲せず勝地を択び只清浄を専らとし木石其宜に隨ひ飽迄祖翁が遺訓を守り風雅を以て主とせんとす

○芭蕉堂は粟津の本廟を摸し承塵には当代三十六大家の肖像及び自筆の句を掲ぐ

但此三十六大家を撰むに就ては本誌の左方に附する投票紙に各位随意の俳士三十六名を記し投ぜられたし

高點三十六家を抜き肖像自筆を乞ひ掲るものとす
○俳諧堂の承塵には此地へ漫遊せし古人

北枝曾良支考涼菟從吾千代希因蒼虬梅室樗良可大而后天遊有節護物春湖連梅
梅笠永機曲川玄黙大夢江波東鱗文器丹嶺免好逸外高深雪鴻證專甫立美杉木主
等の肖像発句等をかきて掲る事とす

- 発企人 加賀山中連
- 補助 金沢蕙廼家連
- 発願主 園亭姜文

御寄附金取扱所 金沢市越中町 蕙廼家俳壇

御寄附金は白嶺集に別欄を設け掲載し領収の證とし猶芭蕉堂に記名簿を設け
永世保存す
加賀 山中 打出小槌

『俳諧白嶺集』には「寄附」の記事が、第47巻から第70巻(明治44年4月)まで載る。第69巻(明治44年3月)には以下の合計金額が記されている(第70巻には合計金額は記されていない。なお第69巻の合計金額は誤っており、50銭不足している)。

山中芭蕉堂御寄附

一金五拾銭也 越後 小熊 東園君

一金拾銭也 越中 吉居 精輝君

小計六拾銭也 合計金貳百貳拾八円四拾銭也

芭蕉堂そのものは前年に開堂しているが、寄附は翌年までなされ、右の合計金額から50銭を引き、第70巻掲載分を足すと、総額238円70銭であったことが知られる。芭蕉堂の総工費などについては不明なので、黒字か赤字かについても不明である。ただし、寄附金が多ければ、たとえば姜文が最初と最後の二度にわたり寄附する必要はなからうから、潤沢な資金が集まらなかった可能性が高いと思われる。

寄附者は、本稿巻末の「寄附者一覧表」に示したとおりで、のべ232名（重複を含む）おり、寄附金の額については、姜文の20円を最高額として、10銭が最低額である。また寄附者の居住地は、広範囲に及ぶ。

俳壇の壇主として会誌を発行するような宗匠は、全国の宗匠とネットワークを持っている。宗匠たちは、会誌の交換や、句集の発行のおりに句を寄せるといった交流をし、句碑や堂の建立といった事業にはお互い協力する。姜文が有力宗匠として、広く交流があったために、全国から寄附が集まったものと思われる。また、居住地が記されていない者も多いため、確実なところは不明だが、東北地方と九州地方からの寄附者は少ない。加賀からは遠隔地のため、こうしたことに協力するような、特に親しい俳壇がなかったからと考えられる。

3 芭蕉堂建立

『俳諧白嶺集』（第50巻、明治42年7月）に以下のようにある。

山中芭蕉堂建設に付ては、各位大に御同情を寄せられ、陸統御寄附金御送与難有奉謝候。愈建設着手の爲め、壇主姜文、本月廿日より凡二週間斗、山中温泉俵屋旅館に滞在、同地発起者と協議経営可致。

同巻に7月14日までの寄附金が「合計六拾貳円参拾銭円」と記されている。この時点では、先に示した総額の3割を満たしていない。この金額で、いかほどのことができたか不明だが、いよいよ協議に入り、まずは建設予定地が選定され、翌月には普請にとりかかることになった。

また同巻には、芭蕉堂の掲額の三十六家の俳人の投票締め切りが7月31日、開

票は8月3日午前10時、山中薬師にて行われる旨が記されている。「加賀山中芭蕉堂新設趣意書」によれば、義伸寺の芭蕉堂に倣ったものである。義伸寺の芭蕉堂を大修理した無名庵16世露城は、姜文と交流があり、山中温泉の芭蕉堂建設に寄附金を送っている。

さて『俳諧白嶺集』（第51巻、明治42年8月）に以下のようにある。

山中芭蕉堂建設地所取極め方に付て、先般来壇主姜文罷越し、彼地発起者と協議の上、愈黒谷橋東詰南へ入る一勝地と相定め、目下普請に取懸り申候。黒谷橋東詰南へ入る一勝地が建立候補地となった。

『俳諧白嶺集』（第53巻、明治42年10月）には

山中翁堂もいよく起工致され、十一月二十四日即旧曆十月十二日迄には成就すべく、同日は開堂式を兼て於同所翁忌執行され候

とあり、起工され、開堂式の日まで決まる。開堂式の日は「翁忌」（時雨忌）の日とし、蕉門の俳人にとって特別な日に行われる予定であった。

ところが関係者にとっては思いがけないことが生じる。『俳諧白嶺集』（第55巻、明治42年12月）に以下のようにある。

山中芭蕉堂は、去月廿四日開筵の筈にて出張せしに、豈凶んや、兼て建築の地と極めし黒谷なる卯の花瀧の頭に柱建せんとせし際、隣地々主より故障申立着手するを得ずとの事にて、当日は笹次楼にて今回新に彫刻の御肖像を据奉り、左右に三十六家の肖像画を飭り、其鳳大人の揮毫の額を掲げ、鄭重なる供物を備へて、時雨忌を催す。

柱を立てることによって、どのような「故障」が生じるかは不明だが、隣地主の申し立てにより、芭蕉堂は予定地に建築できなくなった。当日は、やむなく別な場所の時雨忌を行っている。

また同巻には今後のことについて以下のようにある。

山中芭蕉堂は、前述の如く地処の故障により、今回更めて村吏暨温泉組合の人々と協議し、前にまさる同じ黒谷中の好位置に建築する事となれり。来年暖和の節迄には俳諧堂と俱に成功すべき計画にして、温泉組合の人々も大に肩をなられ、同所の風致を益し、浴客の眼を歎ばしむるの謀事となれるも、皆是芭蕉翁の徳なるべし。

「前にまさる同じ黒谷中の好位置に建築する事」となり、また「温泉組合の人々も大に肩をなら」となり、葛廻家俳壇の人々は、中止にならなくてよかったというほかに、結果的にはその方がよりよくなったと思ったから、「皆是芭蕉翁の徳」と

「翁の徳」という表現が用いられている。なお前掲「加賀山中芭蕉堂新設趣意書」にも

翌年5月には次の候補地が決まり、『俳諧白嶺集』(第59巻、明治43年5月)に黒谷橋向ふの良地を選択し、目下地均しり取係りたる旨通報あり。素より木組等は昨冬出来済故、不日棟上し、賛同諸君の好意に応ずべし。

とある。7月15日には、地鎮祭が行われ、18日には芭蕉堂も完成すると、『俳諧白嶺集』(第61巻、明治43年7月)にある。すでに木組等はできていたので、数日で完成したのである。完成した芭蕉堂をみて山中温泉の俳人紫明は

山中黒谷

建あがる白木の堂や今朝の秋

と詠んだ(『俳諧白嶺集』第63巻、明治43年9月)。旧暦の7月の季は秋のため、「今朝の秋」と詠んでいる。

こうして明治43年10月12日9時、開堂式が行われる。これも時雨忌にあわせたことはいうまでもあるまい。この日のことは『俳諧白嶺集』(第64巻、明治43年10月)に掲載された「山中芭蕉堂供養式概況」に詳しい。以下のようにある。

●山中芭蕉堂供養式概況

予て本誌に報道せし通り十月十二日午前九時黒谷橋の東に新に鎮座せし翁堂に於て供養式を行はる警鈴と共に大工瀧本氏堂内庭上を清め洗米造酒鮮魚白木綿等法の如く供物をなし幣を捧げいと厳に再拜黙禮畢て額を掲げ聯をかけ堂内の裝飾をなし退く此日や猿も小蓑をほしけなる時雨のいたく降りて小止たになきに遠く美作の尾川宗匠を初めとして大阪の林水越前の是好能登の暮峰越中の芳鳩旅伯魯雪梅園隣川精花金澤の八千代招鷺竹窩北江臥人達都て百数十名出場されしはこよなき盛会なりし第二警鈴数千個の餅蒔せん予定なりしも路上泥濘の爲め群集せし童男童女に頌ち与ふ第三警鈴と共に発願主菱文宗匠上堂謹んて像前の帳を排けらる尊像は御丈八寸の座像にして美術会員四分一葉々君か一刀三礼の彫刻になる物から正に二百有余年の今日此所に蘇生し現れ給へる心持せられいと尊く拝れたり宗匠捻香敬礼恭しく供養文を朗読せらる畢て繁折近江一静氏像前に進み献句數百章誦上猶佐渡松朗詞宗よりの電報諸国宗匠方より祝章等を報読し退く菱文宗匠又立て像前に向ひ一斗入の大瓢を左手にとり扇子を撥とし風籬念仏を誦せらる霞曉焙芳一静酔月の諸氏何れも助音其声朗々砌なる卯の花の瀧に和し迦陵頻我の鳴音も斯やと思ふ斗也瓠声々々時雨に応し閑雅優美風流

の極を尽せり是にて式を終り同橋畔旭樓に到れば数名の社員懇懇に迎へられ入口の席に生花數瓶金屏燦爛たる中に並へ立樓上の數席を一間とし俳席とせられ床には紫陽氏蔵の山中や菊は手折らし湯の匂ひの翁が幅即ち加賀の小春へ手つから与へられたる真蹟にて支考叟か添翰をも掲げ傍らの壁間には豊秋氏蔵翁の幅不折氏蔵翁の幅霞溪氏蔵許六の幅小槌氏蔵支考の幅暨霞溪氏蔵の短冊帳是は桃妖叟より伝はる稀世の逸品たりき宗匠は菱文氏副宗匠は豊秋氏執筆は焙芳氏知司は小槌紫陽の両氏香元は霞曉氏座見は一静酔月の両氏にて開筵祖翁か山中やの高吟を起句とし百韻畢て席上へ配膳折詰壇詰を饗せられ小槌氏賓客に對ひ臨席を謝し祖翁の昔我金沢に來りて白露の淋しき味を忘るゝなの教訓を守り態と粗末なる酒肴を以てしたる旨謙遜の挨拶あり夫より献酬織が如く各胸襟を披き俳を論し交を温め風雅の談麗かなり尋て謡曲松風三輪一調蟬丸枕慈童を演せられ猶主客人交り書画の揮毫あり別席には抹茶煎茶碁将棋等ありて充分の愉快を尽されたり本日園遊会を古城公園に設け近傍の各離亭に摸擬商店をなし山中の芸妓残らず饗応方に斡旋せん手筈なりしも生憎降雨のため御流れを成しは遺憾なりし畢に臨んて這回催されし祝賀集の開巻あり分撰三十家の拔萃帖通評両家の拔萃帖を讀上られ猶斯道の万歳山中温泉の繁榮を祝唱して目出度閉會さる百韻及び祝章手向吟并に壁間三十六家の肖像発句等は次巻より追次掲載せん。これには、以下の祝賀の句なども載る。

山中芭蕉堂の成るをき、偶翁が此地の遺吟を懐ぶ

今日や昔手折ぬ菊を手向草 露城

このち昭和28年に現在地に移転し、今日に至る。

4 芭蕉堂建立の目的

芭蕉堂とは、芭蕉を祀った堂のことである。たとえば東京都文京区関口には、享保11年、芭蕉33回忌に建立された芭蕉堂があり、新潟市には、昭和41年5月に建設された芭蕉堂がある。決して山中温泉のみにあるものではない。

芭蕉堂は、あくまでも堂なので、決して大きな建築物ではないが、既存の建物を流用するのではなく、新築するとすれば、それなりの費用がかかる。山中温泉の芭蕉堂は、先に掲げたように『俳諧白嶺集』(第50巻、明治42年7月)に「山

中芭蕉堂建設に付ては、各位大に御同情を寄せられ、陸続御寄附金御送与難有奉謝候」とあるように、寄附金を募っているのです、どのような理由で建立するかを告知する必要があった。同巻によれば、以下の2点が記されている。

① 実に此挙は、翁の旧跡を、新たに天下に表彰するの機会に有之。俳諧の面目と存奉候

② 山中遊園地に一の名所を増加致候て風致を添へ公衆の心を慰め、俳士の倶楽部とも致度希望に候

また第51巻には

③ 此挙は、祖翁の御旧蹟を、新たに天下に表彰するの機会に有之。斯道の面目とも存しられ候

④ 山中の名所を増加し、風致を添へ、公衆を慰め、俳道の勸奨とも致度千萬無量の希望ある事に候

とほぼ同様のことが記されている。周知のために再度載せられたのであろう。

「翁の旧跡」「祖翁の御旧蹟」とは、芭蕉が訪れた地である、ということであり、それを表彰するという理念的な目的が①③で記される。「加賀山中芭蕉堂新設趣意書」に「芭蕉翁が恋愛の地なれば茲に一堂を建て、傍ら俳諧堂を竝設し、永く翁の徳を報んとす」に通じる。

そして観光地の名所作りという二つめの目的が②④で述べられている。

当事者たちに、記されたとおりの思惑しかなかったか、あるいはその他のものがあつたかは、文献資料からは不明であるが、経済効果が目的の一つであつた、という可能性もあろう。以下のその視点でみることにする。

まず①③は、俳諧人口が増えることよつて、菱文の門人が増え、俳壇経営が安定するという効果が期待できる。

また②④は、新たに山中温泉を訪れる人が増えたり、これまで訪れた人が再訪することよつて、旅館経営者に利益をもたらすという効果が期待できる。これがないければ、最初の予定地に芭蕉堂を建てることのできなかつたさいに、新たな地をさがすなどして芭蕉堂を建てることに、村の役人や温泉組合の人々が「大に肩を入」て協力することはなかつたと思われ。まさに「風致を益し、浴客の眼を歡ばしむるの謀事」(前掲)であつたのであろう。

なお前掲『俳諧白嶺集』(第50巻、明治42年7月)に以下のようにある。

成就の上は、施主各位へ記念品寄贈致度計画

寄附金をより多く集めるための手段であらう。

また芭蕉堂の欄間に掲げる36人分の額の俳人を投票で決めることにしている。

八月三日午前十時、山中薬師於医王寺開票選定致候間、御入湯旁御遊来御席

奉希候。

投票の結果、大番附と成し、印刷し、白嶺集附録とす。別段御入用の向は、一枚五錢宛にて分配致候。

投票結果の公表会をするから、温泉に入るついでに出席して下さい、と旅館経営者への経済効果ははかられている。また菱文は、投票結果を受けた番附を会誌『俳諧白嶺集』に付すことよつて、協力してくれる門人たちにサービスができる。また一定の枚数を刷ることよつて単価が安くなる番附を5錢で売れば、『俳諧白嶺集』が10錢であることを考えると、それなりの利益が出たものと思われる。

開堂式は、明治43年10月12日に催されることになり、『俳諧白嶺集』の広告(『俳諧白嶺集』(第63巻、明治43年9月)に以下のようにある。

同地御定宿無之御方は▲扇子屋▲柿屋▲亀屋▲俵屋▲桂屋の各旅館は本誌の客員にて、いづれも叮嚀懇切に取扱はれ候間、御随意に御止宿被下度(注6)開堂式の参加者が多ければ、泊まり客も多くなることはいうまでもない。『俳諧白嶺集』第64巻、明治43年10月)に掲載された「山中芭蕉堂供養式概況」には「百数十名出場」と記されている。

芭蕉堂には、四分一葉々(注7)彫刻の芭蕉像が祀られた。大正2年、菱文の萬廬屋俳壇から、この像と同じものを葉々に100体作成させ、売り出す。以下のようにある。

芭蕉翁座像 用材檜寸法三寸桐箱入

特価金一円貳拾錢 小包料金八錢

需要はあつたよつて、『俳諧白嶺集』(第97巻、大正2年7月)に以下の購入者の句が見られる。

山中翁堂分身の御肖像を得て嬉しさの余り

早速のたむけや新茶花あやめ 越中 幸農

ただし何体売れたかは不明であり、また葉々への支払金がいくらか不明なため、どれほどの利益(損益)があつたかも不明である。

以上のような視点で見ると、芭蕉堂建立による経済効果も、目的の一つとしてあげてよいかと考えられる。

おわりに

芭蕉堂建立が成されたのには、4つの背景があると考えられる。

石川県には、数々の温泉がある。山中温泉が、県内の他の温泉と大いに異なる点は、芭蕉が訪れたことである。他の温泉が欲しくても手に入ることができない《歴史》があるのである。

芭蕉が顕彰にあたいしない俳人であれば、過去に芭蕉が来訪したことは何ら意味をなさない。しかし、芭蕉は、蕉門俳人にとっては神の如き存在である。芭蕉の没後、もっとも大きな流派が蕉門である。蕉門の俳人は、芭蕉がかつてした旅と同じような旅をすることで、芭蕉を理解し、芭蕉に近づこうとした。そのため、芭蕉の訪問地を訪れる蕉門俳人は多い。山中温泉もその例外ではない。

また温泉宿の主人や関係者は、自身の趣味としてだけではなく、接客業に有益な教養として俳諧を嗜む者がいた。もともと山中温泉では、芭蕉の来訪によって俳諧がひろまったのではない。それ以前から俳諧を嗜む者がいて、芭蕉を受け入れられる俳諧的教養の持ち主がいた。そうした状況が、明治期になっても続き、温泉宿の主人たちを中心に俳諧グループ「山中連」が形成されていた。

また蕉門の宗匠菱文は、蕙廼家俳壇の主であり、同俳壇の「山中連」の指導者である。いわゆる旧派の宗匠として全国的によく知られていた。壇員から芭蕉堂を建立する案が出されたおり、経済的にはともかく、それを実現するための人脈を有していた。

以上を整理すると以下ようになる。

- ① 芭蕉が訪れた
- ② 県外の俳人が芭蕉を慕って訪れる
- ③ 温泉の主人らに、接客業として俳諧を嗜む者がいる
- ④ 俳諧宗匠菱文がかかわり深い

こうした背景のもとに、来客を増やしたい温泉関係者がおし進めたのが「芭蕉堂の建立」であったといえよう。その後、堂前に句碑が建てられ、「花供養」「時雨会」といった芭蕉に関するイベントが行われる場として活用され、今日では、芭蕉祭山中温泉全国俳句大会（平成22年で20回を数える）で供養祭が行われている。有益な観光資源になっているといえよう。

注

1 蕙廼家俳壇（石川県金沢市）より発行された俳誌。明治38年4月創刊。小笠泰一氏所蔵。引用にあたっては、私に句読点を付すなどした。『俳諧白嶺集』の記事は、記名のもと無記名のものである。本稿での引用で、記名のないものは、無記名記事である。

2 菱文の事蹟等については稿をあらためて論じた。

3 『奥の細道』に「其功有馬につぐ」とあり、また「山中や菊は手折らぬ湯の句ひ」の句を詠んでいる。

4 「加賀山中連」の俳人と考えられる。なお塚田豊秋は、芭蕉堂供養式のおりの副宗匠。風邪を罹り、明治43年11月28日没、享年69歳（『俳諧白嶺集』第66巻、明治43年12月）。南保霞溪は、屋号扇子屋。『蘆花集』（寛文5年刊）に見られる南保氏の子孫とされる。『蘆花集』は、山中温泉の俳人の名が見られる、現存最古の句集。松浦紫陽は『加賀山中温泉余香』（昭和15年）の発行者の一人松浦重蔵。松浦酒造（銘酒「獅子の里」他を販売）の関係者。

5 金地虎岳。『俳諧白嶺集』（第31巻、明治40年11月）に次の広告を出している。

●蕉翁真蹟売却広告

紙本横物地 内寸 巾一尺四寸余 長一尺一寸余 蒼虬叟箱書附

伊勢まかりけるを送り侍る人に云ける

蛤の二見に別れゆく秋そ

元禄二季秋 芭蕉 桃青 [印] [印]

右真蹟売却依頼され候に付御望の俳士は郵送料金拾貳銭を添御申込ありたし直に通送御一覽に供す尚売価も其節御報道可仕候

加賀松任町字安田町 金地虎岳

この他にも、こうした俳諧関連の物が、俳壇の中で売り買いなされており、古物の流通ルートであったことは注目される。『俳諧白嶺集』誌上で、どのようなものが売却物として掲載されたかについては、稿をあらためて紹介したい。

6 旅館のうち、俵屋は菱文と親しかったようである。『俳諧白嶺集』（第28巻、明治40年8月）に以下のようにある。

山中俵屋に初て入湯せしより五十六年庭上の蔓依然たり

凌霄にむかし語りや椽のはし 菱文

7 『白嶺集白梅合併俳諧白梅』（第151巻、大正7年2月）に以下のようにある。

（第三世皓々処葉々）氏は、文久三年正月、武州熊谷に生る。北守清次郎同じき熊谷蒼斯門皓々処二世朴山に従ひ、明治廿五年、師没後、第三世皓々処を嗣号せらる。又東京彫工工会名誉員にして、以前芭蕉翁御尊影百態を彫刻せられたる、熱心な俳諧士なり。

【寄附者一覧表】

『俳諧白嶺集』に掲載された寄附者・金額等をまとめて作成。「巻数」は『俳諧白嶺集』の巻数。「寄附者」は原則として表記のままとし、旧字のものも新字にあらためなかつた。「住所」の空欄は、『俳諧白嶺集』に無記であることを示す。「金額」の単位は「円」。

巻数	寄附者	住所	金額
47	園亭菱文	金沢	20
	渡邊常	金沢	10
	杉原臥月	金沢	5
48	小熊東園	越後	1
	由宇滄洲	因幡	1
	小雀庵竹圃	信濃	0.3
	吉良蘭亭	伊予	0.5
49	荒井閑窓	下総	3
	見浦梅園	越中	1
	米山月舟	羽後	1
	山口松寿	安房	0.5
	小西環洲	能登	0.5
50	櫻井袋溪	越中	2.5
	阿野松朗	佐渡	1.5
	山西青処	佐渡	1
	吉田芳塙	越中	1
	小野宮柳下	東京	1

巻数	寄附者	住所	金額
	中井社楽	伊勢	1
	式部芹谷	佐渡	0.7
	本間孤松	佐渡	0.7
	室木楽夢	能登	0.5
	守山松花	越中	0.5
	青木三午	佐渡	0.5
	瀧川対荷	佐渡	0.5
	中川一止	佐渡	0.5
	村田暎鶯	佐渡	0.5
	山西屈伸	佐渡	0.5
	久能禰鶴	尾張	0.5
	島田西湖	越中	0.5
	金月静	羽後	0.5
	櫻井袖江	能登	0.3
	湯浅涼草	能美	0.3
	佐渡青藍	能美	0.3
	藤江露華	能美	0.3
	宮地花影	能美	0.3
	伊集院寿広	能美	0.3
	横山一瓢	能美	0.3
	馬場柳徑	能美	0.3
	石黒文濤	能美	0.3
	草木孝恵	佐渡	0.3
	本間秀江	佐渡	0.3
	最上海童	佐渡	0.3
	斎藤其流	佐渡	0.3
	坂本楽志	能登	0.2
	芭蕉堂楓涯	京都	2
	金地虎岳	松任	2
	島林一甫	金沢	1
	畑中湖月	能登	1
	小澤諒石	越中	1

52

咸宜堂蘭畹	滑川風月会	長谷川可同	為豊園耕雨	不如歸庵不如歸	不二庵月人	小西五篤	大窪良峰	安田鳩村	谷蘆月	濱田瓢流	睦月生	室賀香賀	池田青潮	石塚老川	伊藤市葉	岡本碧堂	音田貢紬	松岡樵水	吉岡琴水	四分一葉々	月橋庵鷗坡	園角加光	内川琴碩	山根皓月	井上無物	逸見芹水	大野雲溪	喜多野坐嘯	日良江雨	柴田素雄	白井芭園
伊予	越中	伊勢	伊勢	讚岐	大坂	能登	越中	加賀	松任	大隅	松任	松任	加賀	下総	伯耆	伯耆	伯耆	紀伊	越後	武蔵	松任	加賀	信濃	因幡	武蔵	堺	紀伊	紀伊	紀伊	紀伊	越後
2	2	2	3	5	5	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

53

高須里哉	洲崎翠林	廣瀬良風	竹田凍湖	無名庵露城	箕田凌頂	黒川淮水	中山香林	宮野鶯居	土井鴨涯	山蔭霞遊	柳沼鬼骨	山上華溪	渋谷鳴溪	石橋一興	梶原芭臣	田中神美	竹歳桃邊	安東尾川	辻晚香	廣瀬旭染	高岡逸叟	相羽荷庵	嶋本棠枝	遠藤霜井	佳芳堂北叟	小澤柳人	植田石芝	十步庵如月	金守多山	南無庵眞海	藻谷箕山
								讚岐	近江	大坂	岩代	越中	越中	金沢	讚岐	伯耆	伯耆	美作	伯耆	鶴来	下総	尾張	尾張	越中	大坂	越中	三河	備後	鶴来	讚岐	越中
1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	0.3	0.3	0.3	0.5	0.5	0.5	0.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.5	2	

55

村上村夫
園谷曲池
矢野二道
大間知小雨
篠島羅叟
小竹耕雪
塚越里軒
松原有磯
林鐘園杜瓮
竹内菊園
石橋二鶴
小幡子青
峰岸浅水
林幽嶂
南無庵器水
菊守園菊外
竹井幽谷
羽洲園羽洲
春光庵鶴影
鴨立庵松汀
伏昭旅伯
渡邊竹窩
渡邊招鶯
森山瓢泉
守分月仙
楠本正憲
岡崎文友
大津液雨
栗原富積
渡邊后甫
久保田秋雨
村岡ごめ

金沢

小松

尾張

越中

越中

伊勢

武蔵

越中

尾張

越中

下総

讚岐

武蔵

武蔵

加賀

東京

武蔵

尾張

岡山

相摸

越中

金沢

金沢

54

1 1 1 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 1 1 1 1 1 1 1 1 5 10 0.3 0.5 0.5 0.5 1 1 1 1 1

56

乾柳帰
竹歳寒山
山口暁山
増田石樵
武腰虎竹
久田文鷄
中川芳流
井出光晴
北野豊水
澤田紅汀
大原華山
澤崎秋峰
笛吹梅鶯
小谷樵雨
石田久光
朝倉美芳
北野梅履
吉田千樹
鈴木松翠
丁々洞菊山
前波梅園
馬淵巴柳
藤野間樵山
藤岡愛月
武井月夕
多賀國年
角白鴨
西尾其桃
多賀鷄哉
徳久履川
安東眉石
山口琴湖

大坂

伯耆

鶴来

越後

能美

能美

能美

能美

能美

能美

能美

越前

越前

越前

能美

能美

能美

能美

能美

能美

能美

越前

越前

越中

東京

能美

能美

長門

能美

能美

能美

能美

0.5 1 1 1 0.1 0.15 0.15 0.15 0.15 0.15 0.15 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.3 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 2 2 1 1

